
本誌創刊号はいかがでしたでしょうか。素人集団がナビゲーターもいないまま、思考の試行錯誤を繰り返しながら企画に没頭しはじめたのは、もう1年も前のことでした。それ以降、学内外の多くの方々から暖かいご援助をいただき、創刊号につづき第2号の刊行にこぎつけることができました。

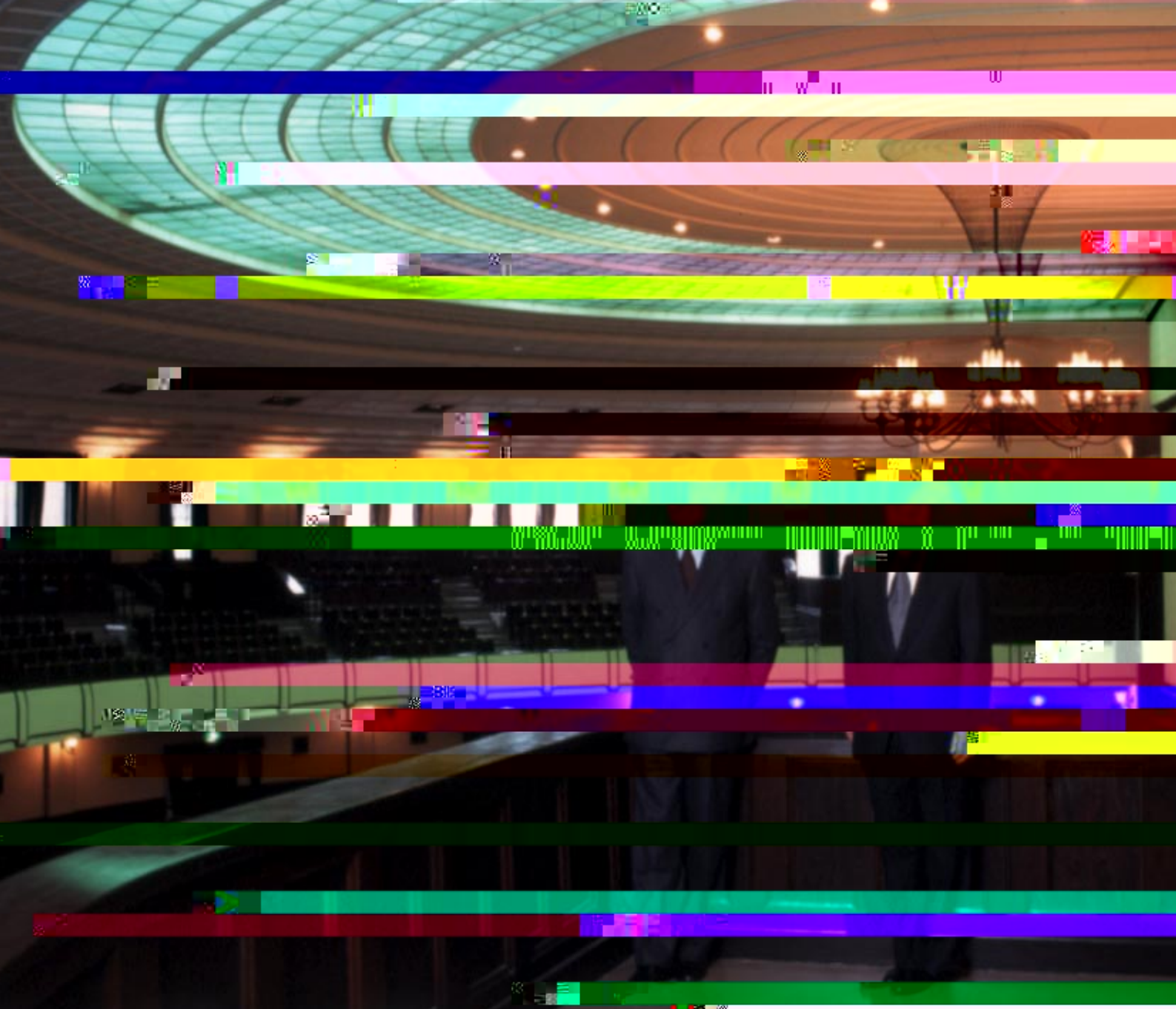
本号の総長対談は、前総長で日本学術会議会長など幾多の要職につかれ、また本年1月からは国際科学会議会長をもおつとめになっている吉川弘之先生をお迎えし、未来を見つめながら、技術・科学・教育のあるべき姿をめぐって蓮實重彦総長と語り合っていました。

特集として取り上げたのは、「大学院を重点とする大学」です。本学は、他大学に先がけ大学院重点化を果たし、知の探求のレベルアップを目指しています。すべての学部が重点化したのは平成9年のことなので、その評価は時期尚早かもしれませんが、「大学院を重点とする」大学のいくつかの側面を浮かび上がらせようとしたものです。

創刊号を引き継ぎ、「教育・研究の現場から」「世界中の東京大学」「サイエンスへの招待」では本学の教育・研究を紹介し、本学に親しんでいただくための「キャンパス散歩」「インフォメーション」も引きつづき掲載いたしました。

創刊号に寄せられた多くの激励のメッセージに感謝いたしますとともに、今後とも本誌に対しご意見・ご批判をいただきますよう、よろしく願い申し上げます。

(東京大学広報委員長 大塚柳太郎)



吉川 私たちの調査委員会のミッションは、なぜ事故が起こったかということでしたから、対応の問題については事実を述べるにとどめました。しかし、ご指摘の問題は本当に重大です。

私たちの報告書の中心思想は、絶対に安全ということはありません、リスクマネージメントという考え方に変えなければいけない、事故は起こり得るといふよりは、起こったときの対応を準備する、という論調になっているわけです。先生がご指摘のように、対応という問題は十分に考えなければいけない。もし原子力を続けるならば、その対応の能力が大きく問われるわけです。

ところが、絶対に安全である、事故は起きない、だからレスキュー隊も準備していなければ、防護服すらもなかった。ご指摘のように、患者が出たときの対応もまったくなかったということです。これは日本社会の一種のタブーというか、触れてはいけないことはいつも積み残して、一面だけしか見ないという、大きな欠点だと私ははっきり申し上げたいと思います。

欧米諸国では、たとえば青年がアフリカに行っているいろいろな協力をするとき、そういう活動をするのだったら、風土病に罹った人間を治すための病院をつくることから始めようということでしょう。私は、フランスなどではこのような態勢になっていると聞いております。

絶対安全に保護する、だから危険なところに若者は出さない、だから病気になる、だから病院はつからない、という発想でわれわれはやっているような気がするのです。これではリアリティがなく、大きな反省が必要だと思っています。

蓮實 あと一つ私が驚きましたのは、臨界事故が起こったことの最初の発見者は放射線医学の医師で、患者さんを診た段階ですぐにわかったということです。発見されたのが原子力や物理学の専門家ではなかったのですね。

それから、日本には臨界事故の経験はまったく

なかったので、ロシア、フランス、アメリカから専門家を呼びました。彼らが診ると、その患者さんの状態がすぐにわかってしまったのです。そのノウハウが日本になかったことは、今後変えないといけないと思うんです。

吉川 そのとおりです。

蓮實 東大病院は必死に対応されたわけですから、本質的なノウハウがなければならぬ

ことです。先生がおっしゃったように、射

八先な
って
で
蒼
応
よ
っ
東
大
病
き

とれ

よには
臨
今
後
変
わ
り
か
ず

そ

すはに
う
う
し
。
で
す
う
て
し
ま

オつくりこそが大事だということです。必要なのは現実のニーズではなく、シナリオを描ける能力で、それは工学とか自然科学の世界より、むしろ文学的なものなかもしれません。ある意味では科学的な研究能力とは違う能力が、科学研究にも必要になってきたといえると思います。

時間という概念の導入

蓮實 先生がなさったお仕事が認められてくるのは、そこに時間という関数を導入なさったからだと思つたのです。時間という要素を組み込む必要性は容易に説得できないわけですね。先ほどのお話でも確実な答えはなく、予測になるわけです。そうなりますと、必要なのは賭けの精神みたいなもので、こうなります、ただしならないかもしれないけれども、なる可能性は大きいということでしょう。この精神を、大学なり知的な社会がもう少し取り込まなければいけないと思つたのです。

時間という概念を入れるというのは、生命の論理ですね。十九世紀の大学では、物理学にする数学にしるの空間のなかに物理があればいいということでは、そのころにも生命現象にかかつた学

電
「さ
れなう殊語ば

者不問のいんはとは勝のいんのさう
ことでは、そのころにも生命現象にかかつた学

れう物理学にしろのいな念を鴉い。そよいにこのい鄭びのいもすね。

甘

星

瓜

隊

空

文